

H. D. ソローの小屋あるいは住まい

奥田 穰一 (大東文化大学名誉教授)

H. D. Thoreau's hut or dwelling

Joichi OKUDA

ソローの研究者は、その研究においてソローの小さな小屋がどんなに重要な意味を含むものであるかについて言及する。ふり返えるなら、筆者も拙著『結晶化するソロー』(1989) その他の要所においてソローの小屋に触れた。いかにそれがソローにおいてかけがえのない意味を持つイメージであるのか論じた。だが管見では、今日でもソローの小屋あるいは住まいについての本格的考察がほとんどなされていないと思われるのだ。以下、筆者なりにソローのテキストにできるだけ密接して、ソローの小屋あるいは住まいについての考察をわずかなりと深めることとしたい。まずは、1854年に刊行された『ウォールデン』の第2章「住んだ場所とその目的」の冒頭近くのパラグラフをウォールデンの森に住み始めた折りのことを語るソローのことばを一引くことから本論を始めよう。

ぼくがはじめて森に家をつくって、昼だけでなく夜もそこで過すようになったのは、偶然にも1845年7月4日の独立記念日だった。その時はぼくの家は冬の準備ができていなくて、ただ雨をしのげるといった程度のもだった。壁土も煙突もなく、壁は風雨にさらされた紙の荒仕上げで、大きなすきまがあって夜は涼しかった。まっすぐな白い間柱や、かんなをかけたばかりのドアや窓わくのせいで清潔そうに、風通しがよさそうに見え、板が露にぬれる朝はとくにそう思えた(99-100)。

「夜は涼しかった」とか、「清潔そうに、風通しがよさそうに見え」とか、「朝はとくにそう思えた」などと、清々しい住まいの様子を語ったソローは、さらにこう続ける。やはりソローが清々しさにこだわっていることに注目したい。彼の小屋にさわやかな風が吹き渡っていることに。

それが昼になる頃には樹脂がにじんでくるのではないかと思うほどだった。ぼくのイメージーションではこのすばらしさは一日中多少なりともつづき一年ほど前に訪れたある山の上の家を思い出すのだった。これは旅をしている神をもてなすのに適し、女神が衣服のすそをひきず

るかもしれないような風通しのいい壁塗りのない小屋だった。ぼくの家には吹く風は山々の尾根を吹きぬける風に似て、地上音楽のとぎれとぎれの調べ、あるいはそのうちのいちばんすばらしい部分だけを運んできた。朝の風は永遠に吹き、創造の詩は途切れることがないけれど、それを聞くことのできる耳はほとんどない。オリュンポスの山は世俗世界の外側いたる所にあるのだ(100)。

ソローには彼の小屋が「一年ほど前に訪れた」ことのある「風通しのいい」小屋に似ていると思われたのだった。ソローの小屋には「山々の尾根を吹きぬける風」が、さわやかな「朝の風」という「創造の詩」が、—「それを聞くことのできる耳」を持ちたいものだとしてソローがいう「創造の詩」が—吹き渡っていたのだ。これがウォールデンの森で彼の住んだ小屋あるいは住みたいと願った小屋の佇まいだったのである。そして、いうまでもなくこの小屋とは清々しい「朝の風」に吹かれる心の澄んだ人間の住む所だっただろう。これがソローの住まい観だったのである。

ソローの小屋には「創造の詩」、「朝の風」が、すなわち、「地上音楽のとぎれとぎれの調べ、あるいはそのうちのいちばんすばらしい部分だけ」が「運」ばれてきたという。よく見れば、ソローのこのことばは、『ウォールデン』第4章「音について」での、ソローが「日曜日、ときどき風向きがいいときに聞いた」という「鐘の音」についてのこの述懐と重なるだろう。

この〈鐘の〉音はまるで地平線の松の葉が、ハーブの弦であるかのように、一種のヴァイブレーションのかかったような音になって聞こえる。……それは宇宙の豎琴のヴァイブレーションといってもよさそうなもので…この場合、空気が漉し、森のあらゆる葉と釘と語り合ったメロディ、つまり鐘の音のうちで自然がとりあげて変化をつけ、谷から谷へとこだまさせた部分がぼくの所までやって来るわけだ(139)。

ソローの「所までやって来」た「宇宙の豎琴のヴァイブレーション」とは「漉」されていたものであった。「漉」すという語は気体にも液体にも用いられる。気体や液体のまじり物を取り除き、きれいにすること、それが「漉」すということだったのであるがソローには空気と水を区別しないで同一視する傾向があった。第9章「ウォールデン湖」で、「畑をこの空の水につき出し、その岸辺を容赦なく裸にってしまった不潔で愚かな農夫」(215)を嘆いたときのように。第5章「ひとりきりの時間」で、「よたかの鳴き声水面にさざ波を立てる風にのって運ばれてくる。風でざわつくはんのきやポプラの葉に共鳴して息がつまってしまうようだ。けれど、湖のように、ぼくの平和な気持ちにさざ波がたつことはあってもかき乱されることはない」。(146)と語ったときのように。ソローの小屋という住まいに運ばれてきた「朝の風」あるいは「創造の詩」、すなわち「地上音楽のとぎれとぎれの調べ、あるいは、そのうちのいちばんすばらしい部分」とは、ソローには「漉」されてとどけられていたはずのもの、清澄な水のイメージで表現されることもゆるされるはずのものだったといえるのである。

ここで日本語の語源をふり返るならば、増井金典氏は、こう説明する。

住む、済む、清むの語源は〈澄む〉です。水が透きとおり、安定した状態を〈スム〉といいます。人が建物の中で心が安定し、澄んだ状態にあることを〈スム〉といったものようです（『日本語源広辞典』2012）。

高橋こうじ氏もいうように「住むとは一つの場所に落ちつくニュアンスが含まれていて、ほのかに安らぎをまとっています。と、ここまでは比較的わかりやすい話ですが…建物の中で寝起きすると心が安定し、澄んだ状態になる、というのは、たしかに思わぬ展開」というものではあったのだ。（『日本の言葉の由来を愛おしむ』。（2017）いずれにせよ、日本語の語源からいえば、家に「住む」とは、心が「澄む」、「清む」ことだったのである。日本語の語源は、ある意味ではソローにおける住まい、小屋の意味を説明してもいた、といえるだろう。

岩波書店刊行の『広辞苑』には「住む」は「巢」と同源か（1955）と、ある。おそらく、ソローの住まい、小屋とは語源的にトリの巢としての意味も含むものだっただろう。ソローは『ウォールデン』第2章の、すでに引いた、彼の小屋について語ったことばに続いてこういていたのである。

すぐにぼくは自分がトリたちの隣人になっていることがわかった。それもトリをカゴにとじこめるのではなく、トリのそばでぼく自身がカゴに入っているのだ（101）。

第4章「音について」では、自らをトリとみなすソローがこう語っていたのだ。

ぼくはスズメがぼくの巢のなかから聞こえてくるのを耳にするかもしれないクスクス笑いや、かみ殺したようなさえずりを身につけていた（128）。

ソローは第一章「経済」でもすでにこのようにいていたのである。

人間が自分の家をつくることは、トリが巢をつくるのと同じ合理性があるのだ（60）。

それなら今度は英語語源的にソローの小屋は、彼の理想的な住まいはどのように考えられるのであろう。英語語源は、清々しい彼の住まいを果たして説明するであろうか。研究社刊行の『英語語源辞典』（1997）には“dwell”（住む）の説明が、その意味の変化から、こうなされている。

dwell. 〈この語の〉意味の変化はおよそ「迷わせる」→「妨げる、遅らせる」→「ぐずぐずする、遅れる」→「とどまる」→「住む」、か。

大修館書店刊行の訳書『シブリー英語語源辞典』(2009)には“dwell”の説明がこうある。

dwell. 住む。居住する、暮らす。この語は主として詩的で楽しい意味を持つが、その歴史はいささか陰うつなものである。原義は「氣絶させる」で、「目をくらませる」を経て、さらに「迷わせる」へと変化した。同義語のサンスクリット語も「迷わせる」、「欺く」であった。この語は古高ドイツ語の「遅らせる」で第2段階を迎えた。すなわち、だれかを氣絶させることは、その人を否応なしに「遅らせる」ことになる。それが自動詞として使われ「遅れる」「ぐずぐず長居する」、さらに「とどまる」「一か所に住む」を意味するようになったのである。

英語語源的にはソローの清々しい住まい、「朝の風」に吹かれる小屋をとうてい説明できまい。英語語源的に「詩的で楽しい意味を持つ」住まいが「創造の詩」に吹かれる住まいと、清々しい「朝の風」に吹かれるソローの住まいと、何か関係があるとも思えない。やはり、ソローの小屋の説明には、日本語の語源からアプローチするほうが適切といえただろう。ソローだってそういうのではなかったか。『アメリカ・ルネッサンス』(1941)でマシセンにより「いつも語源を深るのに熱心だった」と評されたソロー(シャーマン・ポール編『ソロー』57)ならば、日本人の住まいに対して、誰よりも深い関心を向けることができたであろうこのソローならば。ソローの住まい観には、何か日本人の住まい観に一脈相通じるものがあつたように思われるのだ。ここで、江戸後期、清貧にして孤独な人生をきたあの禅僧、良寛を想起するならば、自らの草庵住まいを良寛がこううたう——「どこも年の暮は男も女もあわただしく／ただわが草庵のみ、(無所有で)安らかなり」(『良寛詩全評釈』513)。良寛は安らかに、心を澄ませて草庵に住んでいたのであり、そこではソローにおけると同様、清々しい風が、日本語語源的な涼風、清風が吹き渡っていた——「梢では蝉が鳴き巖下には水が流れている／“草庵には何も無い”とおっしゃるな／窓一ぱいの涼風をあなたにさしあげよう」(『良寛詩全評釈』486)。

山かげの岩間をつたふ苔水の

かすかに我はすみわたるかも

と、五合庵の暮らしぶりをうたう良寛、この良寛は入矢義高氏も指摘するように「澄み」と「住み」を互いに「響」かせている(『訳注良寛詩集』12)。さらにいうなら、ここで良寛は日本語語源的であった——入矢氏にそれが意識されていたかどうかは不明なのだが——のであり、ソローにおけると同様に、良寛が水のイメージで自らの生活を描いていた——ソローのように風と水が一体化して表現されているわけではなかったのであるが——といえるのである。

入矢義高氏は『碧巖録』をば「ひとくちで言えば禅の教科書」であり…その「原本は文学的素養の点で当時の禅者の群を抜いていた、唐代の禅者、重頭によるものである」と、『碧巖録』とは「頌という詩の形式で書かれたものである」と解説する(3-4)。『碧巖録』の内容のみならず、詩魂のような何かの影響が良寛に及んでいたにせよ、いや、彼の草庵を結ぶ行為そのものにそれが及んでいたにせよ少しも不思議ではあるまい。「宇(いえ)を碧巖の下に結び／いささかここに残生を養う」

と良寛がうたったとき、『碧巖録』が意識されていたかもしれなかったのだ。

『碧巖録』六則の「誰が家に明月清風無からん」とは入矢氏も解説するように「心の窓を開くと誰の家にも清風が吹き、明月がさしこむ」（『訳注碧巖録』104）という意味であろう。良寛が「曲（まがり）の盲人」にこう自己紹介したとき、われわれは『碧巖録』の「明月清風」を想起することがゆるさされたらう。「明月」も「清風」も思えばまことに詩的な語句であった。

国上山麓の乙子神社の森は
中に草庵があって私は余生を送っている
立派な邸宅は長く住むのは億劫で
清風と明月こそ私と縁が有るようだ（清風明月似有縁）
（後略）
（『良寛詩全評釈』407-8）

良寛の清澄な草庵、「清風明月」の住まいという、『碧巖録』ともつながる住まいが暗示しているように、日本語の語源としての住まいは、どこかで禅的なものと通じる面があったのではないか。すでに述べたようにソローにおける小屋、住まいとは英語語源的ではなく、むしろ日本語語源的に説明されるはずのものだったが、良寛は、さらにソローでの「朝の風」の小屋住まいに禅的な観点からの考察を促すのだ。『ウォールデン』第4章「音について」の冒頭におけるソローのことばに注目しよう。自分の小屋生活とは「ゆったりした余裕」のあるものだった、とこう語る。

最初の夏、ぼくは本を読まなかった。豆畑の草とりをしていたのだ。いやいや、しょっちゅうもっといいことをしていた。頭の仕事にせよ手の仕事にせよ、どんな仕事のためにも、花のようなその瞬間を犠牲になどしたくないときがあった。自分の生活にゆったりした余裕をもたせることが好きだった。

続いてソローの「ゆったりした余裕」のある生活とはどのようなものであったのかがこう説明される。

ときどき、夏の朝など、いつものように水浴をすませたあと、日の出から昼まで松やヒッコリーやウルシに囲まれ、乱されることのない孤独と静寂のなかで、ぼくは陽当たりのいい戸口にすわり、物思いにふけていた。周囲ではトリがうたったり、音もなく家を飛びぬけていった。そうして西側の窓にさしこんでくる夕日や、遠くの街道を行く旅人の馬車の音で、時の流れに気づくのだった。そういう時間にぼくは夜間のトウモロコシのように成長し、どんな手仕事をするよりもずっといい時を過した。それはぼくの生活のなかから引き出された時間ではなく、ふつうぼくに与えられる以上のものだったのだ。

そして、このような「ゆったりした余裕」の生活を生きる自分を、さながら「東洋」の人々と同じだとみなし、こうソローは述べていたのである——「瞑想とか仕事の放棄ということ東洋の人々が何をいおうとしていたのかを悟った」(127-28)。とするならソローには、一脈禪に相通じる何かがある、良寛に通じる禅味のようなものが見出される、といえただろう。ソローは、「私は昔、静慮を学び(我昔学静慮)／静かに気と呼吸を調えた(微々調氣息)(後略)(『良寛詩全評釈』230)と自らを語る良寛が「何をいおうとしていたのかを」よく理解したことであろう。入矢義高氏の、『碧巖録』六則の解説を想起しながらいえば、「心の窓を開いたソローの住まいにも、良寛におけると同様に「清風が吹き、明月がさしこん」んでいたはずなのだが、ソローがそのことを意識していたかどうか『碧巖録』に目を通したことがあったのかどうか、管見では定かではない。ただソローが誰よりも東洋思想に詳しいことは否定のできない事実である。そのことを否定するソロー研究者もあるまい。

ソローの小屋あるいは住まいについて、さらに考察をすすめるために、『ウォールデン』第2章のこのソローの、禅味あることばに注目しよう。

どこに腰をおろしてもぼくはそこで生活することができたし、風景が少しずつぼくの所から広がっていった。家というものはただの座席？それがいなかの座席だったらもっという(97)。

「それがいなかの座席だったらもっという」のであったが、ソローはいたる所を我家とすることができたのだ。端的にはたとえば彼は第10章「バイカー農場」の終わり近くで、「毎日、毎日、遠くまで出掛けて行くように」とわれわれに促し、さらにこう説いてもいたのだ——「…どこであろうとそこを我家とするべし。……お前は雲の下で雨やどりせよ」(227)。「家というものはただの座席」のようなものだ、とみなし、いたる所「そこを我家とする」このソローが、すでに見たように第2章の冒頭近くで彼の小屋には「永遠の朝の風が吹き、創造の詩」が「途切れ」なかった、といていたのだ。別言するなら、彼の小屋とは彼には「ただの座席」の一つにすぎなかったのであり、その「座席」にだけ「朝の風」が吹いていたのでも、「創造の詩」が「途切れ」なかったのでも、なかったのである。

ソローには小屋をあのように建てて一か所に留まるのはある意味では何か不本意だったのではないか。うっかり一か所に留まり続けるのは、何だかますます人間くさくなること、自然から離れることだっただろう。じっさい小屋に住んだのは2年2ヶ月の間ではあった。家具の整った家に住んだりするくらいなら「野原にすわっていた方がいい。人間が破壊した所でなければ草にはほりなどつもらないのだから」(50)と、自然の清浄さを称えるソローだ。ソローには戸外の自然の中でこそ澄んだ「永遠の朝の風が吹き渡っているはずだった。ソローが『日誌』第5巻293、1853年6月22日において、「ぼくは野性を、時間がいつも早朝である森をあこがれる」といていたように、自然とはソローには「早朝」を意味し、そこで吹く風は「朝の風」だったのだから。

「人間は自分たちの道具の道具になってしまった。……〈家を建てて住み〉人は「もうテントで夜

だけキャンプするという事はなくなって、一か所に落ちつき、天を忘れてしまった」(51)などと、ソローは慨嘆していたのだった。そういえばソローは「これまでにぼくが所有していたことのある唯一の家は、ボートを除けば夏に遠出をするときに使ったテントだけであった」(100)と、小屋住まいする前の「家」についてわざわざ語っていたのだった。

ここでまた『ウォールデン』第4章をふり返えていけば、この章ではすでに述べたように「清風が吹き、明月がさしこ」んでいるはずであった。第2章で吹いていた、あの清々しい風、「朝の風」とは、第4章で吹いたこの「清風」と一応は異なるもの、といえただろう。だが、よく見れば「ゆったりした余裕」の気分で語られた第4章の東洋的、禪的な「清風」は、第2章で語られた「朝の風」とは何か異なる。第4章の「清風」には「ゆったりした」弛緩が、第2章の「朝の風」には、緊張が感じられる。「朝の風」の吹き渡る第2章のパラグラフとは、「たとえ隣人を起こすだけのことになっても、止まり木にとまった朝のおんどりのように元気いっぱい自慢げにうたうのだ」(99)との、このパラグラフの直前で語られた、ソローのこぼの緊張感をそのままに伝えたもの、といえただろう。東洋的な「ゆったりした」感覚からいえば、この緊張感は、ピュータンだったソローのピューリタニズムとこそつながっていたと考えられる。

『ウォールデン』第11章「より高い原理」はソローのピューリタニズムが最も端的に表現された章だった。ここでは、その緊張感が「朝陽」のイメージでこう告白されていた。

この数年間、ぼくはいくぶん自尊心というものを削らずには釣りもできないことを何度となく思い知らされた。……釣ってしまうと、いつも釣らなければよかったと思うのだ。自分がまちがっているとは思わない。それはかすかな暗示のようなものだが、朝陽の最初的一条の光も同じだ。……いまの食事や肉類にはなにか本質的に不潔なものがあるのだ」(233)

第2章のあの「朝の風」、ソローの小屋に吹いていた「朝の風」、「創造の詩」に、ピューリタニズムの「朝陽の最初的一条」が、その緊張感が織り込まれていたにせよ、なんら不思議はなかっただろう。

あのようにソローは、彼の小屋あるいは住まいをも「ただの座席」とみなし「…どこであろうと、そこを我家 (everywhere at home) とするべし」と言っていたのであった。だが、『ウォールデン』(1854)以後に刊行された、ソローの作品を窺うなら、どうやら“home”に対するソローのそのことばは空しかったと、現実となることなく終わっていたと、そう想定されるのである。清々しい「朝の風」を、「創造の詩」を、日本語語源的清風を、体験する機会にはもはや訪れることがなかったのではないかと。以下、そのことをざっと述べることにする。

『メインの森』(1864)の第一章「カターダン」で、カターダン山の頂に登ったソローは、そこをば「混沌と太古の夜」によって支配された所と呼び、さらに、そこでは、「敵意のある雲」が「平らなテーブル状」の土地の一切のものを「見えなくしていた」(63)と嘆いていたのだった。「荒涼とした空」の下、永遠の「寒冷」によって上に伸びることができず、「真っ平」になっている、「穴だ

「庭」(61、70)の上を、すなわち、この上なく凄まじい“home…of Necessity and Fate”(70)の「庭」(61、70)の上を歩かなければならなかったのである。周知の通り、ソローの批評家はカターダンの山頂に登ったソローが、そこであまりにも荒涼とした、非人間的な自然を、どうしようもない混沌を発見したと、ソローはこの体験によってそれまでずっと抱いてきた自然観をついに変えてしまったと、ペシミスティックな人間になってしまったと説明する。これは傾聴に値する意見なのであるが、しかし、ここでわれわれは「…どこであろうと、そこ」が「我家」だ、人間の住まいとは「ただの座席」にすぎない、と自信にみちていっていたあのソローが考え方の変更を——ウォールデンの森で彼自身の小屋住まいについて抱いてきた考え方の変更を——迫られていたのだ、ということ忘れてはならないのである。それこそ、ソローにはペシミスティックだっただろう。じっさいソローから小屋住まいを取り去ったら何か残るだろう。先ず小屋生活を語った古典『ウォールデン』は残らない。小屋の前に広がるウォールデン湖も存在する意味を失う。ソローの人生そのものが残るまい。

『ケープコッド』(1865)において、暗い、ペシミスティックなソローは、ケープコッドをば、沈没しかけている、不安な般のごとき岬として、われわれにこう紹介した。

ケープコッドは、海岸の雑草という、か細い無数の錨鎖が切断されたなら全くの難波船(wreck)となってしまう、ほどなく海底に沈むことであろう(202)。

ここには、ピューリタンの住むケープコッドについてのありのままの現実の姿を伝えるリアルなソローがいる。『ケープコッド』のケープコッドの家、住まいにも『ウォールデン』のように澄んだ「朝の風」あるいは「創造の詩」は吹かないであろう。ソローそれが吹くのを期待もできまい。『ケープコッド』第4章「浜」の終わりでソローは「浜の荒涼としたくぼ地に…小屋が、「大西洋の家」が、つまり遭難者のための「慈悲の家」が「一つ、ぼつんとある」(74-75、66)のに気付いたのであった。だが、あまりにも、この「家」がお粗末なので、ソローはこんな「家」では「遭難者を保護できまい。毎年、点検していた慈悲深い人間が不注意になってしまい、嵐や難破はあり得ない、とでも思っているのだろう」という(74-77)。もちろん、ここで「慈悲深い」という語句には皮肉がこめられているのだ。

「家」の暗い内部を、「星のない夜」を覗き込んだソローの目は「床の上に石ころ」などを発見しただけであった(78-79)。「床の端の方に暖炉」があるみたいであったが、この「暖炉」のそばには「マッチもわらも干し草」もおかれておらず、ここにはただ“wreck of all cosmical beauty”だけがあるのだった(78)。「パンのかわりに石ころ」を与えられた気がしたソローは「慈悲とは何と冷酷なものなんだ」といっていたのだった(78)。

ついにソローはこの「慈悲の家」とは、じつは「夜の混沌の家族」が住む「家」なのだ、と結論していた(79)。すでに見たように、メインの森のカターダン山頂の“home …… of Necessity and Fate”の内部にも、どうやら「混沌と太古の夜」だけが存在しているらしかった。ある意味では、

ケープコッドの浜の「慈悲の家」はカターダン山頂の“home …… of Necessity and Fate”と大差のないはずのものだったと想定されるのである。

参考書目

- Paul, Sherman. Ed. *Thoreau*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1962.
- Thoreau, Henry David. *Cape Cod*. Ed. by Dudley C. Lunt. New York: W.W. Norton, 1951.
- *The Journal of Henry David Thoreau*. Ed. by Bradford Torrey & Francis H. Allen. New York: Dover Publications, 1962.
- *The Maine Woods*. Ed. by Joseph J. Moldenhauer. New Jersey: Princeton Univ. Press, 1983.
- *Walden*. New York: W.W. Norton, 1951.
- 入矢義高『訳注良寛詩集』東京：平凡社，2006.
- 他『訳注碧巖録』東京：岩波書店，1992.
- 梅田修他訳『シブプリー英語語源辞典』東京：大修館，2009.
- 奥田穰一『結晶化するソロー—冬の視角から』東京：桐原書店，1989.
- 蔭木英雄『良寛詩全評釈』東京：春秋社，2002.
- 高橋こうじ『日本の言葉の由来を愛おしむ』東京：東邦出版，2017.
- 寺澤芳雄編（主幹）『英語語源辞典』東京：研究社，1997.
- 増井金典『日本語源広辞典』東京：ミネルヴァ書房，2012.
- 新村出編『広辞苑』東京：岩波書店，1955.

（本文「H.D. ソローの小屋あるいは住まい」の後半部における、ソローの『メインの森』と『ケープコッド』について論じたヶ所は、「大東文化大学創立記念論集」（1993）に発表した拙論「ソローにおける home」を少しく修正し加筆したものである。また、この本文での『ウォールデン』の日本語訳は 1981 年 Jicc 出版の、真崎義博訳に拠ったが多少変更を加えたところがある）。2018.7.10.

（2018 年 9 月 27 日受理）